

第3回 世界小児集中治療医学会 (モントリオール)に参加して(1)

国立小児病院 麻酔集中治療科
小児医療研究センター 病態生理研究室

中川 聡

恩師Dr. Barker主宰のモントリオールでの学会に出席

本年の6月にカナダで開催された3rd World Congress on Pediatric Intensive Care(第3回世界小児集中治療医学会)と、第7回小児集中治療ワークショップに参加する機会を得た。前者は、6月25日から29日までモントリオールで、後者は、前者のポストコンGRESS・ミーティングとして6月30日にトロントで開催された。

私は、1991年に、佐多フェローとしてトロント小児病院(the Hospital for Sick Children)で、小児集中治療と小児麻酔の短期研修の機会を得た。その後、1993年には、同病院の小児集中治療部の臨床フェロー(専門研修医)として、再びカナダの地を踏んだ。トロントで2年間の研修を行い、その後、米国での研修を経て、1996年に帰国した。帰国してからも、カナダへはたびたび訪問している。早いもので、私が最初にカナダを訪問してから、10年近くが経過しようとしている。

今回のモントリオールでの「第3回世界小児集中治療医学会」は、トロント小児病院の小児集中治療部部長のDr. Geoffrey Barkerが会長として主宰したものである。私の小児集中治療医学の基礎は、私のトロントでの研修時代にDr. Barkerの指導によって築かれたといっても過言ではない。恩師であるDr. Barkerが主宰する今回のモントリオールでの学会は、私にとっては万難を排してでも出席したい学会であった。

若い「世界小児集中治療医学会」

世界小児集中治療医学会は、今回で3回目という若い国際学会である。第1回は1992年に米国のボルチモアで、第2回は1996年にオランダのロッテルダムで開催された。実は、第1回のボルチモアでの学会にも私は参加しており、その時は小児でのpressure support ventilationについての研究成果をポスターで発表した。第2回の学会がロッテルダムで開催された1996年5月には、私は米国での研修の最中で、残念ながら、この第2回の学会には参加できなかった。

今回のモントリオールでの学会は、世界50か国以上から2700人も参加者があったとのこと。第2回のロッテルダムでの学会の様子は、



中川 聡 / なかがわ・さとし

1984年 東北大学医学部卒業

同年～1987年 沖縄県立中部病院臨床研修医

1987～1988年 沖縄県立宮古病院小児科医員

1988～1992年 国立小児病院麻酔科研修医、医員

この間1991年1～3月 佐多フェローとして、

カナダ国トロント小児病院へ留学

1993～1994年 カナダ国トロント小児病院

小児集中治療部臨床フェロー

1995～1996年 米国マサチューセッツ総合病院および

ニューイングランド医療センター

小児集中治療医学臨床フェロー

1996年 国立小児病院麻酔集中治療科医員

(小児医療研究センター病態生理研究室研究員を兼任)

現在に至る

私は知らないが、8年前の第1回と比べると明らかに規模が大きくなっており、小児集中治療という専門分野が世界中で着実に浸透しつつあることを示していると感じた。

今回の学会で扱ったテーマは、急性呼吸不全や人工呼吸管理から、臓器移植、生命倫理、外傷といった幅広い領域をカバーしていた。プログラムは、4日間という限られた日程の中で、参加者がいくつかのテーマに照準をあわせながら、新しい知識を吸収したり、世界のエキスパートと意見を交換したりできるよう、構成されていた。今回のモントリオールの学会は、総括的でありながらアットホームな雰囲気もあり、私がこれまでに経験した国際学会の中では、もっともリラックスしながら参加できた学会であった。

学会出席の意味

今回の学会に出席することは、私にとっては、いくつかの意味があった。まず、学会の主宰者であり私の恩師であるDr. Barkerに感謝の意を表すこと、次に英語での講演を行うこと(多くの聴衆の前での英語での講演は、今回がはじめてであった)、最後に、昔、一緒にトロント小児病院で研修をした仲間と会うことである。トロント小児病院の小児集中治療部の臨床フェローの大多数は、地元カナダの出身ではなく、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、米国などの世界各国からトレーニングのためにトロント小児病院の門を叩いた者である。

学会3日目の夜に、学会場の近くのホテルでトロント小児病院の歴代のフェローを集めてのパーティーがあった。文字通り、世界中から歴代のフェローが集まった。イギリス、アイルランド、スイス、



アイスランド、オーストラリア、香港、インド、イスラエルなどといった参加者の出身国を見ると、Dr. Barkerが蒞いた種が全世界に広がっていることが、一目瞭然であった。日本からは、宮坂勝之先生(国立小児病院)、田村正徳先生(長野県立こども病院)、阪井裕一先生(国立小児病院)、渋谷和彦先生(東大)、桜井淑男先生(慈恵医大)といった歴代の臨床フェローに加え、鈴木玄一先生(順天堂大)と秦恒彦先生(福岡市立こども病院)が、佐多フェローを代表して出席された。私は、家内と一緒にこのパーティーに出席し、Dr. Barkerに、これまでの感謝の意を伝えた。

盛況の講演会で発表

今回の学会では、シンポジウムやワークショップなどで、宮坂、田村、阪井の先生方に加え、私も発表を行う機会を得た。そのなかで、私にとって最も大役だったのは、NMI社が主催したランチョンセミナーでの講演であった。このランチョンセミナーは、学会3日目の6月27日火曜日に開催され、“Are Complex Ventilation Modes Always Essential?”というテーマのもとに、三部に構成された講演会であった。今回の世界学会の会長であるDr. Barkerが司会をされ、まず、宮坂先生が“All You Need Is a Patent Airway”と題する講演を行い、私が二番手として“All You Need Is Pressure Controlled Ventilation”という題で話をし、そして最後にトロント小児病院のDr. Peter Coxが“All You Need Is Volume Recruitment”という講演で締めくくった。

すなわち、この3つの講演を通して、気道管理から人工呼吸のモード、さらに有効な肺容量確保の方法について、概観できるという構成になっていた。この講演会は、当初、100人程度を集められれば成功と考えられていたが、最終的には、400人近くの聴衆を集め、昼食も追加注文をしなければいけないという事態になり、主催者にとってはうれしい悲鳴だったに違いない。

英語での講演に緊張

私にとって、英語での講演は今回が2回目であった。1回目は

1997年の香港でのアジア小児科学会で、その時は、肺損傷予防について話をした。その時の聴衆は100人程度だったと記憶しているが、今回はそれを越える多くの人々が集まったので、それだけでなく、慣れない英語で講演するために緊張していたのが、輪をかけて私の緊張は高まった。

しかし私の緊張ぶりを察してか、司会のDr. Barkerや、私の前に講演された宮坂先生が、話をしやすい雰囲気を作ってくださり、実際、講演をはじめるときになると少し落ち着いて話ができるようになった。肝心の講演のほうは、うまくいったのかどうかは、自分ではわからなかったが、講演の後にDr. Barkerから“You speak well.”といわれて、お世辞がかなり入ったねぎらいの言葉だろうとは理解しつつも、とりあえずは及第点の講演ができたのだらうと自分で考えるようになった。

国際学会の成果とたのしみ

今回のような国際学会では、経済状況のすぐれない国からの参加者も多く、そのような国での集中治療、人工呼吸管理を考えると、かならずしも高価で多機能を搭載した人工呼吸器が必要なのではないことは明白である。それを前提に考えると、人工呼吸管理に必要なのは、最新鋭の機械ではなく、必要な機能を搭載している信頼できる人工呼吸器と、その使い方を知っている人間であることは、先進国や開発途上国を問わず共通の真理である。そのことを、今回の講演会を通じて、ひとりでも多くの人たちに理解していただけたことが、この企画の発案者のひとりとしての希望である。

今回の学会では多くの恩師や旧友たちに会うことができた。トロント小児病院の医師だけではなく、小児集中治療部の看護婦さんたち、それから、一緒に研修をしたかつてのフェローたちとは学会場でも、また学会が終わった後の夕食会でもいろいろと話をすることができた。また、シンポジウムやワークショップなどでの発表を通じて、新たに知り合いになった人たちもいる。これが国際学会の楽しいところである。今回は、3年後にアルゼンチンのブエノスアイレスで開催されるとのことである。

(続く)